



門遠13
號 973
卷 4

本清

イモ

安部仲磨 生死流轉 輪廻物語卷之四

あべのやまをあらはれ附やまをあらはれし事
安部保名未歴 保名信太社小白狐を助る事

物代星移り桑田瑠璃海須叟小政あはれなりて幾年月を過怪する人天

文曆道はるも高見安部晴明とせし村上天皇の治世天曆年中の出

生安部仲磨の末葉あり業と吉備氏の末は流く後之吉備の後流

ともいふ時の天文の司廊ありて位従四位上は昇り主計頭を兼り

圓融花山院三什の帝は朝勤して種々の奇術を顯し

を如何く言ふ爰に入王六十一代朱雀帝の承平の頃

部野一人の男子あり聖詔を守り佛業を継らる清く白く生質

あまこと。是を憂きまじ。眼中清く面色白く生質

平屋

大

期購

深きるみと雖みづろよ人と争ふ。数頃の田園よ身の分限を安んじて平
 己は元支然るに近村隣郷の人何とあつていふ。此人は往古安部野の領
 主ゆゑ。天龜年中入唐あり。安部仲磨の二子満月丸の末流。之斯
 田舎の民間也。希ある家柄人柄なり。として希あつてよびなれば。いと
 へあつて自う。安部希名と呼称す。耕作の暇有らば。螢雪の窓に書
 成繕うて見ぬ古の人を友とす。教々として怠らざる。無つて。一日孝經の第一
 章。身を立父母を敬りて。名を後の世に揚ぐる。孝の終ありとあり。其見
 て。つゞくと思ひ。多る我幼稚ありて。父母小別を。反哺の孝盡さば。と朝
 夕遺憾あり。ひが。身を立名を揚ぐる事。孝の終ありとあり。いふ。あも
 して人ゆも知らず。家をも興へて。孝道の其一端。成全する。吾んといひ。愚
 鈍の身を以て。及ぶぬ。成全する。是又量を知らざる。斯る時こそ。仏

神小祈りて加護を頼まんと。和泉ある信大明神。小祈。推。杖。一。百。見。間
 泰指せし。小不思議あり。満泰の曉夢も。あつて。幻も。あつて。家と興へ
 名を揚ぐんとあり。山城国加茂神主藤原保憲が。許。至。て。陰陽卦
 トの道を學べといと。尊神神託。せ。た。ひ。く。安部野。立。歸。り。俄。に。旅。の
 用意して。山城国。赴。る。然。る。に。加茂保憲。と。す。吉備大臣。よ。九代。の
 末孫。と。陰陽道。ハ。言。も。さ。ら。へ。生質温順。あり。て。言。少。あ。く。尊。き。ま。媚
 び。卑。く。死。を。侮。と。ら。む。実。小。徳。行。の。君子。なり。妻。ハ。一。人。の。女。を。生。ま。く。早。く。身
 ず。つ。り。れば。保憲。此。女。を。寵。へ。て。名。を。高。子。と。呼。ぶ。今。年。十。六。の。春。を。て
 迎。え。し。る。容貌。の。美。し。死。の。も。非。む。心。を。も。又。や。う。う。な。れ。由。あ。り。人。を。尊
 と。な。り。て。家。を。續。せ。む。や。と。思。は。れ。る。に。不。思。儀。あり。昨。夜。の。夢。小。明。日。攝
 州。安部野。より。陰陽の道。成。學。び。て。ん。と。尋。ね。來。る。者。あり。是。を。終。業

と續べたのありて後、其の葛子大夫とて、其の賤を侮らざらんと思は
 教授せよとの告ある也。怪しむるも思ひあがり、心は秘して言も山崎に
 其日も午過ぎ、黄昏近くなり、頃保憲大人の此家へと尋ね来り
 少年の古く垢れ、旅衣のちぎれ、草鞋を履き、これらん秋の案
 山子とて思ふ計の取られども、少くも臆む愧らむ禮をつくして音信
 されば、保憲叔父と心よりあづかいた、いふも加茂保憲の某へ足下へ又何と
 よう来れりと、向ひて彼者又一段礼を厚く、某の攝州安部野の
 農夫安部希名と稱者、少くも不智短才の生とあれど、陰陽易曆の道
 を学ん為り、尋ねずらくも願ひの師弟の約をあけて教授、加
 えあつらば、何喜ひは是は過人と、言は追後輕薄あく心の長と演言せし
 へ取賤は引替り、實は見所ある壯士と保憲心中は深く喜び、叔父

神託は符合せりと直に師弟の約を許して、夢想の夏夜語り、希
 名又大に驚死、今日某が来りしも、又尋常の夏は非むと信太明神の告
 ある由を詳くは物持まは保憲是は於て珍奇異の思ひとあり、斯迄
 神勅著明き上、教るのめも学ぶのめも、其は怠慢あるべからざると從是夏
 へ天の熱もいとあつと、冬は嚴霜の寒を肩とせむと、切瑳琢磨して其道
 を學び、夏往來一年許り、已は其大概を極し、とて一日保憲奥より
 閑室に希名を招き、去年以来の汝の修行も尋常の人十年の切瑳
 勝たり、因て我大抵の傳えしあれども、遠く祖先より家傳に
 の神祕を傳えむと、今其神靈成并せて、魚美を授け、抑我家の往
 昔元正天皇の命は依り、養老元年の冬、唐土は渡り、異国は美名を
 輝せし、吉備大臣の末葉に四十六代孝謙帝の時、初く加茂の性を



あべのやま
安倍保名

狐

賜^{たまは}りしを以後^{いご}代々^{よりのついで}加茂^{かま}を名乗^{なをり}て遂^{ついに}鴨尊神^{鴨尊神}の神官^{かみ}とありぬ然^{しか}る^も祖先^{せんぜん}吉備大臣^{吉備大臣}の入唐^{いとう}せし前遣^{まへにや}唐使^{たうし}安部仲磨^{あべのなかつり}死後^{しご}に至^{いた}りて心^{こころ}を寄^よせし簠^ふ蓋^{がい}内傳^{うちでん}金鳥玉兔集^{きんちゆうとつしゅう}と号^{なづ}けし秘書^{ひしよ}あり云^い宗^{むね}皇^{みま}帝^{てい}深^{ふか}く怪^{あや}むひと吉備大臣^{吉備大臣}遂^{ついに}乞^こ受^うけ^ける^ま飯^い朝^{あさ}せ^らまぬ然^{しか}る^も多^{おほ}う^くり^の小^{せう}是^{こゝ}を家^{いへ}の宝^{たから}とせ^とも^も仲磨^{なかつり}の一子^{いっしよ}満月丸^{まんげつまる}は渡^{わた}りて安部家^{あべのいへ}再興^{さいかう}を討^うん^とと思^{おも}われし満月^{まんげつ}の行衛^{ぎやうゑい}知^ちりて遂^{ついに}家^{いへ}断^つ絶^{ぜつ}は極^{ごく}し人^{ひと}是非^{ぜひ}あ^らず我^{われ}家^{いへ}傳^{でん}ふと雖^{なほ}又^{また}惟^{ただ}容易^{やうい}は是^{こゝ}を開^{ひら}く^まを^を許^{ゆる}さ^ずも深^{ふか}く秘^ひし重^{おも}く祭^{まつり}りて是^{こゝ}を大元尊神^{だいえんそん}と号^{なづ}け奉^{ほう}りて代々^{よりのついで}固^かく封^{ほう}むるの^のを^をめ^めて吉備氏^{吉備氏}より某^{かの}に至^{いた}るまで九代^{くわうだい}の間子^{まがひ}々^々孫^{そん}々^々一人^{ひとり}も此書^{このしよ}を親^{おん}と^と并^{なら}せる者^{もの}あり其^{その}故^{ゆゑ}ハ世書^{よのしよ}は茶^{ちや}桓^{けん}尼^に天^{てん}の法^{はふ}と云^いひの有^あり若^{わか}く人^{ひと}此法^{このはふ}を得^える時^{とき}ハ鬼^{おに}を殺^{ころ}し神^{かみ}を使^{つか}ひ雨^{あめ}を呼^よぶ風^{かぜ}を起^たり雲^{くも}より上^{かみ}り水^{みづ}より入^いる禍^{わざはひ}を^を變^かへて福^{ふく}とありし乃^{すなは}ち類^{るい}

心^{こころ}は墮^おせむとといふ事^{こと}あり云^いふ人^{ひと}其^{その}人^{ひと}は非^ひされ^れる^ま其^{その}法^{はふ}を得^える^ま事^{こと}あり然^{しか}る^も野^の狛^わハ畜^{ちく}類^{るい}あれども通^{つう}力^{りき}ハ人^{ひと}は過^{あや}りぬ處^{ところ}有^あり能^よく此^{この}奇術^{きじゆつ}の^の有^あり事^{こと}を知^しり守^{まも}護^ごの怠^たりぬ時^{とき}前^{まへ}を待^{まち}て虚^{うつろ}は無^なしとてこれを奪^{うば}ひんとせし事^{こと}あり二度^{にど}三度^{さんど}及^{およ}び一^{ひと}代^{しろ}々^々固^かく封^{ほう}むるの^のを^をめ^めて其^{その}事^{こと}に至^{いた}るまで其^{その}事^{こと}は其^{その}法^{はふ}を得^える^ま事^{こと}ありを披^ひ見^{けん}せむ是^{こゝ}は則^{すなは}ち祖先^{せんぜん}の遺^い成^{じやう}して朝^{あさ}夕^{ゆふ}ハ官^{くわん}殿^{てん}を拜^{まつ}りて柝^{たせ}板^{ばん}心^{こころ}を^をま^ますもの^{もの}を請^{こころ}汝^に謹^んて并^{なら}れし事^{こと}あり二^{ふた}間^まの狭^{せま}押^{おし}開^{ひら}く^ま其^{その}事^{こと}は其^{その}法^{はふ}を得^える^ま事^{こと}あり中央^{ちゆうおう}ハ高^{たか}く抵^{たい}りし額^{がく}字^じハ大元尊神^{だいえんそん}茶^{ちや}桓^{けん}尼^に天^{てん}と記^しす事^{こと}あり一^{ひと}て吉備氏^{吉備氏}の神^{かみ}に對^{たい}するが如^{ごと}く成^なりて希^{まれ}名^な難^{がた}背^せき肘^{ひじ}は須^す弥^み大海^{たいかい}の師^し恩^{おん}報^{ほう}を時^{とき}常^{じやう}ありし事^{こと}あり云^いふ人^{ひと}多^{おほ}く病^{びやう}ゆ^ゆ家^{いへ}は男^{おとこ}子^こ無^なく其^{その}法^{はふ}を得^える^ま事^{こと}あり夜^よ念^{ねん}ハ掛^かりし處^{ところ}靈^{れい}夢^むは依^よりて去^いる^ま以^もて來^きりし事^{こと}あり

汝亦世にも怠慢の心を生ぜざし千鍛万錬して修行成就は及び
 誠よこまらぬ生前の喜べ然る上の尚神虎の重たしやうせし合ふ
 父子とあり。娘葛子と妹夫の二つありて家も親も如く道徳
 汝は附屬まきさの間尚も焦心覃思して道の道なる所を明らぬよ
 神前の神酒を土器に移し。葛子も側近く呼寄り。夫婦の盃
 子の契約。保憲の斤名を譲りて安部保名とあのせして易曆の秘
 残る処あり傳達せし。希名が喜びひらりて。父子の親と師弟の
 礼力を竭して事えし。斯むうの心願一時は成就して。阴阳道の秘
 を悟く。加茂神座保憲の智とすてありし。夏皆是信大明神の御恩
 と思ひたれば。保憲は暇を乞て。下先摂州安部野に立ち上り。直小信大
 社に至りて。神さびとら神前も躰籠る。在子の音恭しく。頂も

の未つる。夜深月深。峯吹やうか松風の音冷し。折しもあはれ遠く
 聞ゆ。貝鐘は数十人の人声せし。保名は心中大に怪し。并殿より
 出て四方を此と見渡せし。尾花葛花露しが。薄が本を押さへて
 頭を出し。数百年を怪しうとわが。白狐の保名是を見せし。あ
 も。弥怪と思ふやう。野狐も数百年を怪て。白狐とある時の頭は名玉茂
 棒。尾は宝珠を藏め。恩を知り仇を報ひ。常は社極を参りて死するこ
 雖社を枕して。仮も社極を後よせむ。故は孔子も首紅と宣へし。あ
 冥歎の世処は出る。夏子細あんと思ひ。故度は飛下伺ひ。るれ。今
 く押ま親しく如くあて。逃むともせむ。耳を垂ま。尾を伏せ。打られ
 する体あれ。保名初めて心付。扱は合南えし。貝鐘こそ。狐狩り。あ
 なる神変不思。後の業通も。あらぬ時の有が。を救ひ。くれよ。の夏成

て早く神殿の下に隠し置た。再度并殿へ上りては程なく、
 列卒の者此彼彼と尋し、尋しもの有りて并殿の上は行立
 する。保名が影を見え、大に驚た。汝夜中は志のひりて能も我を
 うきよま。不埒至極と有なれば、保名笑く我の神職の家子にて、
 宮殿の當番あるを見答ふ。各々そ夜中何故よ来まらや。若狹持
 の人々ある。今それある薄の中より、さもをさうげある白狐出り、向の
 野原へ駈去らうと。ゆれて思慮あは列卒ののりども。然るに跡を追
 んと慌忙ぞ出て去らう。斯く保名ハ曉天の頃、神殿の下より竊い
 ぶせて背の衣へ逃し、なれば白狐ハ黄ある涙を流し、物得のしねど堂
 を合せ、二度三度振り顧み、救いと深た蘭菊の叢さうて馳入らう。
 彼狐を狩出せし、櫻本宮の臣下橋元方公の家士めて、帝の威然

假る執狩は、民の田島の荒蕪をいと、終日終夜狩らうと、
 事にかのひし、最悪むべたの甚し、たあるまや

保憲流刑 信太の白狐前生を物語事

ちらんころがうてんり、いさよまのちけらんり、
 治乱興亡の天下の常態、一家一身の上も、又是あり、加茂神官藤原
 保憲の吉備入唐の昔よりして、己は二百八十年、家門日々は新し、
 天慶九年春の頃、不慮の夏出来たり、其故ハ當時成明親王とヤ奉
 る。醍醐天皇才十四の皇子めて、當今六正しく同母の身君ハ天性
 和よ御座く、民を慈むの御心深く、其項西臺舟園の南より千本の櫻
 あつて、其辺に在れば人呼ぶ、櫻本宮と稱し、ある臣下橋元方公も
 性奸曲の人あるゆへ、君を邪道ハ導き、と様々用心を用き、
 少しも用ひあり、酒色を以て御心を蕩くも、かんと、智計をめぐら

せし折る。加茂保憲の女萬子及び無死美人の由。その聞え高うつり
 れば元方再三元求まざる。保憲曾て兼引されば是を胸悪き事と思
 ひて種々の機養及び。遂に所領没収して父子ともに相州藤澤の
 驛車墮と云処へ流刑せらる。元方は輝後極つる。頓て此旨保憲が方へ
 仰出されば保憲兼て元方の野心ある度を察せし。今般俄に
 勅勤の身とある。此人の邪曲より起り。度を知りて少くも驚き。只
 大元尊神の宮殿空しくあらん。深く歎死。史多志。摂津より安部
 保名を呼寄せ。如きの由詳は物結りて。彼宮殿と譚んで守護し奉
 る。元方吉祀されば。保名兎角の返答め及び。涙は咽びさうらり
 む死居らう。保憲言をあらげ。能くせらる。度あれをこそ。
 ところの処呼寄せ。うく女々しく振舞ハ何事をや。身も家も

代難た。大元尊神の宮殿。他人の手は渡らん。事と心とせ。向後保
 憲が子。非まといとも。死父の叱り。保名涙をかく。御教戒
 つぎに兼引。大元尊神の宮殿。父子夫婦。再會の時節
 まで。預つらる。暇をさへ。被官殿を。肩は擔つて。安
 部の家。立歸り。祭祀料礼息。其後余処。都の便
 聞及。加茂保憲。罪有。己は父子。東国へ流さ。聞
 悲。此のや。此宮殿を預ら。我も。行。東の
 空を泳ぬ。日もなく。彼是。日。過せ。或夕暮の田の。壁を
 傳ひて。女一人。旅。瘦まり。体。多。高子。保名。大。馬。たて
 近付。不。事。の。次。身を。問。高子。外。言。只。朝。夕。恋。思
 の。思。ひ。あ。り。て。来。り。と。い。保。名。亦。怪。と。恋。思。は。尋。ね。上

りしと云ふ事あざら。年老より父上の苦勞を見捨てるは是より
過する不孝の有ら。我こそ恩ある舅の安否と云う下らんと思ひし
ども。大元尊神の官殿を預りし身は是非もあく空しく月日を送りし
に然る御身父上の側より有る推人百々の介抱ありと云ふは
くひひれは萬子涙を流し妾も斯くありひふれど父上の仰せ我
神職の身より有る先祖傳來の神は別と云ふも。不孝の罪是より
大なるあり。保名より縁畧の有るはたれども。汝已に彼と夫婦を拘
せしうら。尚もとむく睡ぐ。神は仕えなれ。我は仕ゆる百倍を仰せ
せひあく。遂は一人の男子を設けし。地兒眼中人は勝まで。咲兒恰
も花の如くあれ。掌中一顆の珠と愛して月日重あやど。天曆四年

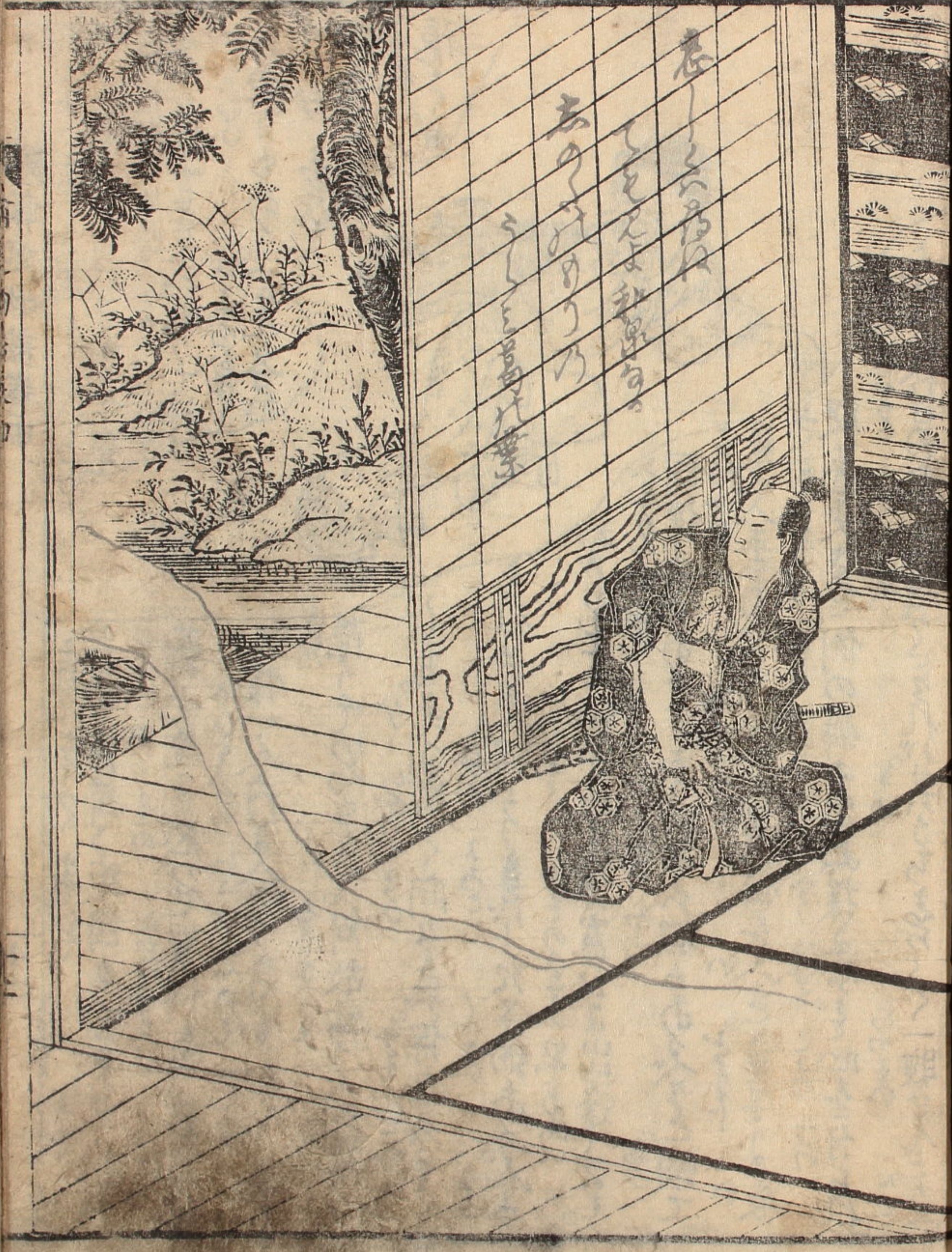
は既四才も成なる。其頓悟あり。近隣の人是在を異言するもの
あり。とけく親心より其喜びごとへんくあり。然るは此小兒怪異ある事
に。猪虫を取喰ひ蛇蜈蚣をも更は恐む。保名の是れ安らぬ。ぬらひ
て。冬蟲を喰ひ蛇蜈蚣をも更は恐む。保名の是れ安らぬ。ぬらひ
る。或日葛子に向ひ。我は日々田畠へ出ま。製し。死良も有ら。其好
ひ。終日家。在ま。時々刻々。折檻あり。と云く。殺し。子。然も五
体満口。人も羨む。発明あれど。世より更ら。願食ハ奈なる。前世乃
悪業あり。若此終して止む。の。成長の未思ひ。中ら。して怖
ろ。必叱り戒めて。人の笑ひ世の謗ら。うらぬ。様。せ。ま。下。と。涙
あ。ら。言。残。農。業。よ。そ。出。る。妻。あ。と。あ。つ。く。と。我。子。と。傍。に
引。寄。て。暫。く。言。も。無。ら。が。稍。あ。り。て。言。様。い。う。は。童。子。よ。其。方。ハ。何。と

て虫蟻をば喰ふふぞ父上の今の御言。母の胸まひしくと釘打ごとく
 又有りぞや。愧しくつね六十八氏人の種あれど母の血筋をつぐ人も人
 まろつて虫蟻を喰らるるの悲しさも母の無理と六思ひぬ。若此中事よ
 りと躰れて母が素生を知れをば最惜し死そあごと棄置て行わばあつと
 去わばならぬ其時の我悲しさ今より思ひやりと三首を按額を撫
 此理を聞分と止てくれすと討ま。又さめくと泣かれば童子の母の膝
 りりこれか様其様をなせ泣きあかすは別ま一日も遊び樂むるがあら
 ら。蛇や百足もあつと蜘蛛や蝨もむぐと口の中めて面白く喰つ
 しく喰へ私が好あれど御前の悲泣あり。今より急とやめやさんとこ
 へも行で下されちと母の心を子の知らぬ恩愛とて了衣へ保名八秋の指
 刺時。今ハ妻子を亡目の農業者日を昏し。立ゆらんともつた暮る。暁成

傳ひて二人連近寄これハ舅保憲妻の葛子旅瘦をそれと見よ
 保憲ハ保名を以ひ其此度小野茂吉公のとうありして其罪非る死
 赴関白公も聞し召ま折を以て天奏有むれの間ひそく小登ととの
 侍りより。五年以来の憂難難。語つて我等を晴さん為葛子ととのふ
 来りしと足下も無更よ大元尊神の宮殿も。心あく在まやと。いと
 ねく保名不審。先以舅御の此度内々御許を蒙つ。御帰有しこそ
 目出度なれ。兼て厚恩を蒙つ。其東の間も怠も。大元尊神の宮
 殿を守護し。まもる。異変のあれど心得ざらん葛子が五年以前上
 られて保名と共に官殿を守護せよとの父の御。それゆゑ今もま
 くと格うしゆ。名も葛の葉と改る。都の人。姿を隠し。夫婦睦
 ちづく連添て。四ヶ年前は男子を投父の御。今明日と待くら

世のそありし。今又此は葛子の帰と来し。怪しき。彼が虚ゆて
 此実ろ。世虚ゆて。彼実ろ。途方ふく。一休あり。なま。葛子且歎き且
 驚た。保名が傍ゆつと寄と。その心得ぬ。仰り。妾が此年月の夏。若坊
 も。再び相見ら。夏もやと。それだろ。と。樂よ。父は仕え。其間も。折らぬ神
 の無し。男心の定あ。相逢や。を待たせて。妻を呼び。子哉。設け。情
 あれ。の。数々も。今。ひ。ひ。の。無。終。五。年。以。前。は。上。ろ。と。六。道。辞。も。と
 ば。後。ろ。余。ろ。は。嘘。の。白。く。と。恨。つ。泣。つ。た。く。ど。け。ば。保。名。も。多。つ。と。り。て。あ
 ず。左。疑。ろ。無。理。あ。ろ。ね。ど。我。ま。と。作。つ。と。言。べ。た。ろ。殊。は。御。身。を。妻。と
 いら。と。義。理。あ。ろ。恩。師。の。娘。を。ろ。ろ。其。を。余。外。あ。ろ。別。は。又。色。は。濁。ま。く
 某。と。あ。ろ。ハ。御。身。の。誤。と。ろ。の。疑。念。を。晴。ま。為。斯。く。は。ま。ま。ど。い。げ。ろ
 ら。早。く。我。家。へ。来。せ。と。て。先。は。立。し。を。保。憲。と。め。て。汝。今。我。と。同

伴して。疑惑を晴さんとの。夏理は。當と。何は。とも。あ。き。五。年。来。子。迄
 生。し。ろ。夫。婦。の。間。と。や。他。の。女。の。あ。き。我。娘。葛。子。の。名。を。ろ。ろ。て。来
 一。虫。子。細。ぞ。あ。ろ。ん。然。ろ。ろ。直。は。内。は。ろ。ろ。と。先。門。外。は。ろ。ろ。と。我。々。始
 未。を。伺。り。知。ま。ぎ。ろ。夏。は。も。あ。ろ。ど。必。も。驚。し。ぬ。ひ。ね。と。示。し。合。せ。く。保
 名。が。門。の。茂。る。樹。木。の。蔭。は。ろ。ろ。と。保。憲。一。人。内。は。ろ。ろ。と。某。は。住。吉。へ。訪。る。も
 の。あ。ろ。ど。道。の。案。内。の。知。れ。ざ。ろ。ろ。又。近。頃。卒。尔。あ。ろ。と。あ。ろ。承。あ。ろ。ろ。ん。為
 立。寄。し。と。音。信。声。は。葛。葉。ハ。童。子。は。漆。乳。の。折。あ。れ。ど。も。起。上。ろ。て。丁。堂。に
 住。吉。へ。の。路。次。方。角。教。へ。示。せ。し。声。音。上。ろ。安。容。は。至。ろ。迄。は。ち。が。ひ。有。ま。れ
 心。中。は。驚。あ。ろ。早。ろ。ろ。謝。を。述。ろ。直。は。門。外。は。出。ま。り。此。時。葛。子。も。物
 蔭。ろ。ろ。始。終。の。様。子。伺。ひ。ろ。ろ。と。我。声。我。敢。彼。こ。そ。正。し。く。我。身。成
 あり。我。ハ。却。く。誰。や。ん。と。惱。ま。て。言。も。あ。ろ。ろ。と。父。保。憲。も。眉。を。蹙。り



春
 こそよ
 去の
 こと
 喜ば



ふ
 ひ
 てる

和歌をのあして
 白狐抜子小
 別

車
 延
 歩
 言
 巻
 口

いの
七の
けつね

保名も其の自とあが不。免
も角の某の飯つて村
らふ音もあつ。一先各
物の産よ心
隠る。



それと云く。たきや
某が声掛る。近出のふたど二人
薪小屋の窓に置。何気な体
て惟一人内に入り。葛葉の今日に
限つてのりもよう。何故ゆの遅く
とまう出く向。保名をさ
それこそ何より喜ぶ。た子細あり。今日
あり。途中。保憲公は出逢。同
同伴の女あり。少くも暇もある。頓て
是へ入来。あさん。汝の髪は掛。入。童子は衣
服着更。例の癖の出ぬ様。必。心を付られ
よ。我ハ終日の疲。堪。其。一。睡。せんと。支

をうふ。禊の蔭。狸寝入と知られる。葛の葉の何とあ。かひ有け
んえ。保名が二向は寐入を伺ひ。童子の傍へさ。う。て。決。あ。ら
よひひら。や。童子雅。丸耳のう。つ。あ。母。グ。言。を。承。り。ま。最。前。虫
蟻の異見をせし。能も漆々と聞入。別。事。も。あ。つ。其。悲
さ。ゆ。つ。と。言。れ。時。の。我。あ。ひ。胸。も。さ。さ。く。村。を。遅。れ。速
くれ。遂。は。一。度。の。別。を。ね。あ。ら。ぬ。支。と。知。う。あ。づ。一。日。あ。つ。と。居。ら。ち。が
我。の。し。と。か。ひ。ひ。今日。と。い。今。是。を。限。う。別。身。と。あ。り
ぞ。御。身。寐。耳。は。聞。覚。え。父。上。は。世。と。生。ま。く。又。吾。実。の。人。向。の。群。衆
和泉。ある。信。大。の。村。は。年。を。経。一。白。狐。野。干。の。身。し。ぞ。一。頃。村。人
の。已。我。命。を。奪。ん。と。せ。を。保。名。殿。は。助。ら。れ。其。報。恩。の。為。と。て
姿。を。改。一。五。六。年。善。悪。二。ツ。の。思。ひ。あり。其。善。と。い。ふ。の。恩。を。報。さ。る

假の身よりつゝ終は御身を宿し。難有や勿体あや。畜生の身も
 人間の。就を宿せし喜ひの程あはく御身を産し。愛着の細に
 心をひらき。五年六年の長き。一日二日と暮せし。最前物づく
 保憲公の上り。事を聞や否。今も別をねらぬ身の上。白狐野干
 の通力も子故の闇よりせらる。昨夜使も夫や子を添寐の床の別れ
 と。夢の。是れ。我子を。悲その愚癡ある畜生残害
 へ人間よりも百倍。暫し泣入居し。思はく。迷ふ。その悪
 心と。人を懺悔せん。本我前生。日本の者。昔唐玄宗皇帝
 と仕。維州の官人。玄東。妻。右將軍隆理。娘隆昌。女。云者
 其頃。日本の帝。元正天皇の勅。因。吉備大臣。唐土。渡。我夫。玄東
 と。禁廷。其。碁の勝負。及。時。我夫。已。死。命。と。吉備大臣

仁心を以て。助。寛仁。大度。流石。日本の。国。風。慕。折節。玄宗
 皇帝。より。簞。簞。内。傳。金。鳥。王。克。集。と。り。書。を。賜。て。帰。朝。の。と。死
 安。祿。山。々。村。ひ。ひ。て。古。備。已。は。危。う。と。我。風。渡。の。津。に。助。付。く。吉。備
 大臣。大。吏。を。明。し。命。を。捨。て。活。命。の。恩。を。報。せ。其。時。も。流。石
 女。の。執。着。心。命。を。代。へ。吉。備。氏。の。危。救。ひ。し。然。あ。る。事。あ。れ。ど。も。
 我。唐。朝。無。二。の。宝。を。空。し。他。国。へ。渡。さん。口。惜。く。又。嫉。中。く。一。念
 遂。に。簞。簞。の。一。書。を。追。く。此。国。へ。渡。ると。い。ふ。日。本。神。国。と。て。人。間。の。胎
 宅。に。ぐ。く。愧。し。や。信。太。の。社。の。白。狐。身。と。生。を。ま。た。し。て。最。前。に。簞
 簞。内。傳。の。茶。瓶。尼。天。の。法。あ。ま。何。卒。是。を。傳。へ。得。く。女。婦。の。言。は
 至。人。と。思。へ。加。茂。神。祇。の。家。に。在。り。近。づ。き。葉。の。叶。ね。は。ま。ま。年。月
 を。送。り。五。ヶ。年。前。の。災。変。を。彼。書。の。此。家。に。授。け。し。を。幸。な。れ。

近寄て傳を暮し取速く女婦の宜き至り。九萬九千の眷属の孤
 又是を傳へんと入込夏入込に流石の生命を救ひて。恩を
 中々結ひ重あつて帯御身を産し其時より本の願ひも
 亡き守り育つと樂み心つくせし申すもあふ。今日を限り別
 恩ある人の秘藏せし書と奪んとせし應報は此若を見せぬ死因
 果觀面天四符は実な争らぬものなり。断意て出んとし。出んと
 戻り。勝を断ら哀接の。おひは勝り野干の余波聞く悲しきの堪
 兼く。安部保名保憲親子。おひも二回立出れば取の消し見え
 母は。此物音は知子の驚き覺て泣踊る。保名おひも上声を揚童子
 か母は。行く。行く。由來聞らる。やう容易に故まらぬ。あ
 く。留りて。此子成育て。恋しやと。一間を。と押明さる。

句の障子にくくむらう

恋し。六尋ねても。和泉。信太。社。ら。み。着。毎。景。
 葛子悲し。さゆら。あ。信太の社へ尋ねぬと。保名を。さ。め。催。ど。も。
 保名心中愧慚の体めて兎角の言もあつて。保憲進。い。で。ま。
 抑保名白狐と契て一子中を。生。せ。と。本意あ。も。思。り。ま。さ。全。く。
 耻づ。れ。ま。非。も。既。は。天竺の古。白沢王と。せ。し。四。良。九。目。を。見。し。漢。土。
 の神農氏。の。牛。頭。人。身。と。を。聞。及。る。我。朝。の。神。代。の。昔。鶴。鶴。草。草。
 不合尊の。竜。女。の。腹。より。出。生。し。あ。ひ。あ。と。正。史。の。録。に。記。す。皆。人。の。
 知。る。処。あ。り。後。人。間。も。心。負。あ。る。時。の。禽。獸。均。しく。禽。獸。小。も。
 せ。よ。五。年。子。間。貧。し。世。帯。を。若。勞。し。て。世。子。を。養。育。せ。し。志。を。仇。
 思。ふ。ま。の。有。へ。た。る。さ。ら。ば。葛。子。が。勸。ま。す。せ。恋。し。の。歌。は。就。く。信。太。の。

杜をさびらけんと恩愛美理を弁えし。翼の異見うらまへて啼も止る童子とまじり。願く信太へ赴たれり。

信太の鬼火 安部童子竜宮に到る事

斯く保名の童子を携ひ心いそげど秋の日の程あく暮く風さむそ草茫々たる信太野辺をまよわす。若や童子が呼つらハ恩愛よひうれし山ゆせんと教え悟せ心得くく様恋し乳が吞たのし声を限りし呼りつた父も涙をおく拭ひ童子の母よ我妻よせめて今一度姿を見せよと叫ぶと王鉾の御よひく音あつてそれと答ゆるものもあつ。扱も心づよや遺書の歌の言の偽をうと死心とちり折ららば遙く見ゆる鬼火の次あくる近寄て本の姿を其の中ら。忽然とて躰れらる。保名見らるる声を掛汝何の愧うた事有る。

飛を隠せしぞ。こひ獸類畜類と人のちり我為よ二世を撰る妻

あつどや。せめて此子が十四五まで。再度我家に立歸り。つと添事わ

ならざる歎此子を不便とおもひもか。問ひきて涙も面も得奉む。恩

愛の道り恥しむ。我輩の法として一度正体を見らる

は時又と其人は逢夏うありきと。若其法よそむくと死ハ八百八十の親

属よ見放され九万九千の眷属は捨られ。未来永劫畜生の果と

出ら度能われれば。別を泰くする。飛飛をまむと。此子が影身

に附従ぐひ永く守りし神とありなん母子の愛着夫婦の因縁。今

を限り別り。實の姿を見ぬと言ふと思へ。有る一飛

の消失。古れ白狐と頭れが。草むら深く入らる。保名も我も声

を揚げらる。飛ちるあると。保名が心はうららと。跡も今なや

よふ夜も更りたる草野原雲霧冥々月濛朧眼も遮るりの燃残し
 狐火の光耳も入りの吹盡を松風の音童子の頻り泣出して欺き
 うさん手段もあく。頼り我家へ飯うら。子を思ふ心の闇やうらまを
 八千八声啼盡し。保憲葛子楮共其六年も早暮る。春のくさや
 夏の田植もあれぬ業も時の盛衰農事よ心をつけせし折くら不思議
 あらぬ淋節誰とも知まざりて夜毎く。数十人の女の声あて恋うさる夜
 ぢんと明行が晝の信夫の杜よまき妻恋虫のねを鳴と唄文句のあ
 やしれや童子が伴く立出まは。是ぞと思ふ人もあく。夜明後田面
 を見まは。見事は植付あうら。保憲葛子その志を感じ。朝夕童
 子を寵愛し。且教導り及び。処女の母の守護や有る。六十才の頃
 にもあれ。己は陰陽道の大意を悟りて祖父保憲も父の保名も心

元吉又有りしと。年月来去して天曆八年。童子年八才。あそ
 る。六月晦日。住士の祭礼例年の如く。塙の濱辺ぬれ申うら。
 教方の小童。打集りて。一の亀を殺さんと。此時安部童子も其申
 い。活らうら。余り不便の良も。助んとせれども。多勢は無勢
 外の小童の炸さぬ。故其日晴着小せし。新ある早夜は代く。亀は
 助け其身の裸体とあうら。い。濱辺遊び居る。処忽然と
 して白髪を羽よ。い。艘の漁舟は棄つて海に浮ぶ。か。ひら
 りの向く。波間をく。水底うら。至ると管入し。真珠の沙灘に
 瑠璃の臺珊瑚の階。金殿玉楼。そつら。亀宮城に至る。頓て
 八大竜王の目前。召され。塙の濱りて。亀を助け。謝儀に。草仙
 丸といふ。二粒を賜り。汝人間界は。帰ら。是を左右の耳に入

新編物語卷四

十七

よ必まを能鳥語り通して。名を掲げ家を興き事有べしと云声の如く
夢の如く。覚く海庭を泉ある堀の濱辺にゆつて見ま。景色何と無
変り。故頓と安部野に立歸る。昨日の家是非をて何とやら
覚束なく。内に入らんとせし其折節。父の保名門外に立出く。汝の童
子。我子りと悦び驚死尋めりゆ。某昨日住吉の祭礼より。不思後
めも。竜宮城に至る。一日一夜ゆて。歸り。と思ひの外。父の御年の老
し。とひ四方の景色の変わり。抑ゆるある子細やらんと尋ねる。父
の涙を拭ひ。本汝の數千年の白狐の腹より生えし。あれ。秋のうら
らぬ事。左も有べけれと替り果る。浮世の様心を考めて。涙をすまはせ。
汝住吉の祭礼に行。天曆八年寅六月ゆて。今平号も改。今
應和元年の正月あり。然るは汝住吉ゆて。入水せし。聞。時其悲し

さして入んく。殊は故ある童子ある。母の守りもあつり。と歎く
より。猶悲し。た。繼母の舊子。狂気の如く。我婦。又舊業。悲
し。死別。とあせ。く。せ。あ。く。童子を養育し。無支。成長。存人
ものをと思ふ。ようひ。あ。死。今日。の。悲。し。と。人間。あ。ぬ。身の上。人。受。理。を。立
く。歌。を。見。せ。せ。と。ま。ま。引。く。我。の。す。と。あ。ま。ぬ。中。あ。る。母。子。ゆ。人。あ。る。そ。う。に
して。殺。せ。し。く。こ。実。の。母。り。ま。ま。せ。と。ま。ん。と。耻。や。悲。し。や。と。それ。を。病。の
振。と。して。終。り。其。年。身。中。う。ま。る。又。其。上。は。舅。保。富。年。ご。ろ。の。若。芳。積
つり。て。老。病。ま。た。つ。身。を。苦。め。鐵。灸。茶。餅。の。効。驗。あ。く。翌。年。の。春
桂。月。の。雪。と。や。も。果。あ。く。消。ゆ。と。生。残。り。の。我。を。う。り。其。は。消。ゆ。く
田。心。え。と。も。心。り。は。籠。り。大。願。の。い。ま。ど。果。さ。ぬ。その。中。は。世。は。あ。た。人。と。成。あ。り。大
元。尊。神。の。宮。殿。を。守。護。ま。る。人。の。有。り。と。彼。を。思。ひ。是。を。思。ひ。惜

うらぬ命を^{いのち}あきらめて^{あきら}今又^{いま}汝も^な逢き^あも^は夢^{ゆめ}初^{はつ}の^{はつ}世^よ界^{かい}無^む常^{じょう}の^の身^みあ^あり^ま又^{また}
 何^{なん}ぞ^ぞ若^{わか}き^きと^とせん^んと^と悟^{さと}り^りて^て見^みて^ても^もさ^さあ^あら^らは^は情^{じやう}田^{でん}切^きあ^ある^る目^め思^し愛^{あい}ひ^ひ
 こ^こ入^いら^らけ^け悲^{かな}し^し死^しら^らけ^け先^ま立^たり^りの^の涙^{なみだ}あ^ある^る暫^{しば}し^し言^{こと}も^もあ^あら^らな^なら^ら



安部仲磨^{あべのなかつら} 生死流轉^{しんじりゅうてん} 輪廻物語^{りんねものがたり} 卷之四^{まきよのよ} 終^{はつ}



本又命
 用

